

28PA-am140

消化器がん患者における周術期・術後化学療法・薬薬連携を通してのシームレスな薬剤師のアプローチ

○中島 文男¹, 細川 健一¹, 伊藤 弘美¹, 坂井 克也¹, 大島 由莉¹, 堀部 一晃¹, 桜田 宏明¹, 山村 益己¹ (1一宮市立市民病院薬)

【緒言】一宮市立市民病院（以下、当院）では、入院前を含む周術期から退院後の術後化学療法、薬薬連携へと途切れのない薬剤師による患者への介入を目指し、各種業務を展開してきた。最近では、消化器がん患者での周術期における介入を強化するために術後悪心・嘔吐（以下、PONV）のリスク評価テンプレートを作成し薬学的管理を開始した。今回、これら各業務における実績と、一連の業務でシームレスな介入を行った症例を報告する。

【方法】各種薬剤師業務を以下の時期に開始した。Ⅰ. 病棟業務:平成2年7月、Ⅱ. ICU:平成22年4月、Ⅲ. 手術室:平成23年4月、Ⅳ. 外来化学療法室:平成23年4月、Ⅴ. 薬剤師外来:平成27年11月、Ⅵ. 患者サポートセンター:平成28年10月、Ⅶ:薬薬連携:平成25年9月、Ⅷ. その他（消化器がん患者におけるPONVリスク評価による周術期薬学的管理:平成29年10月）。Ⅰ～Ⅷの業務実績を調査した。

【結果】1) 平成29年10月の各業務実績は、Ⅰ. 薬剤管理指導1,817件、Ⅱ. 薬剤管理指導85件、Ⅲ. 術後PCA調製56件、Ⅳ. 化学療法指導247件、Ⅴ. 内服抗がん剤及び麻薬指導61件、Ⅵ. 術前面談167件、Ⅶ. 薬薬連携66件、Ⅷ. PONV評価13件であった。2) 症例:64歳、女性、盲腸癌、Ⅵ→Ⅰ→Ⅲ→Ⅰ→Ⅳ→Ⅶと入院前から退院後の一連におけるシームレスな介入を行い安全管理に努めることができた。

【考察】今回示した周術期・術後化学療法・薬薬連携といった各種業務の展開により、患者へのシームレスな介入を可能にすることができた。しかし、実績結果から業務によっては介入に課題を残すところもあり、今後は周術期でのPONV評価の徹底や更なる介入ツールを検討し、良質な医療を提供したいと考える。